

# 青蘿発句注解 四

富田志津子

はじめに

今回は、青蘿の発句のうち、天明二年から同五年の句を注解した。その頃の青蘿は、門人も増え、一門が充実していた時期である。蝶夢とのつながりは、引き続き密であって、義仲寺の時雨会に出向いている。また『奉扇会』に投句しているのも、蝶夢とのつながりであろう。

一

天明四年は門人蘿来の十三回忌で、蘿来の身内の李雨と臥菊が、追善集『萩の輪』を刊行した。立派な、栗の本門の俳書である。臥菊は蘿来の息子と思われる。天明五年刊の『露の月』（桃如編）も栗の本門人重羽の追善集である。栗の本門人には富裕な人が多く、今後、こうした追善集が多く出されることになる。

天明五年、青蘿は金毘羅・厳島詣に出発する。備前那波の門人、嵐外と鍛交の企画であった。「おもふどち七八人、従者童子のたぐひまではたちあまり打つどひ」（『讃州金毘羅山芸州厳島詣之記』）三月七日に那波を船出し、九日に金毘羅宮参詣、十余日に厳島神社に詣でている。その時の船旅を、青蘿は『讃州金毘羅山芸州厳島詣之記』という紀行文にした。青蘿自身の発句は十六句入る。

本稿は、『讃州金毘羅山芸州厳島詣之記』の十六句を注解したところで終えた。（引用文や句の文字のうち、旧字体は現行に直し、濁点、句読点を補った。また、適宜、振り仮名も付している）

① 跡したふ夢や千里のほと、ぎす  
 夏(時鳥) 出典『白達磨』(天明三年、風逸編) 青蘿

【訳】千里のかなたへ行ってしまった時鳥、自分はその跡を慕って、夢を見ることだ。

【注】『白達磨』は、加賀の歌人で俳人でもあった白達磨見風の三回忌追善集。時鳥は、黄泉国へ行ってしまった見風である。青蘿は見風と面識があったかどうかは不明。青蘿二十代の頃、諸国行脚をして一時加賀の關吏を訪れた。その折に、見風とつながりをもったかもしれない。同書には、栗の本門人の雨人や李雨の句も見える。

② 盞を花にかけばや燕子花  
 夏(燕子花) 出典『まだら鴈』(天明三年、陸史編) ハリマ 青蘿

【訳】燕子花の花は、盃のような形だ。それなら、本物の盃を花に掛けてみたいものだ。

【注】燕子花の花の形状を詠む。『まだら鴈』の編者の陸史は井波の人。梶良を迎えての記念集。梶良が序文を書いている。

③ 月しぐれ昔をながむこよひ哉  
 冬(時雨) 出典『しぐれ会』(天明三年、蝶夢編) 青蘿

【訳】時雨会の前日、時雨が降って月が隠れてしまった。月をながめる代わりに、芭蕉翁の昔をひたすらしのぶ今夜であることだ。

【注】時雨会速夜興行の歌仙の発句。前書は「同(天明三卯年)十月十一日速夜興行」。このとき、青蘿は義仲寺ま

④ 箕をさびる先を吹とる時雨かな  
 冬(時雨) 出典『しぐれ会』(天明三年、蝶夢編) 播磨鹿見 青蘿

【訳】箕をふるってゴミを落としていると、時雨と風がやってきて、ゴミは時雨の中にふきとられてしまった。

【注】「箕をさびる」は播磨の方言で、箕を使ってゴミをふるい落とすこと。落ちたゴミは時雨の中に消えていく。この句は「一坐念香」に入る。本書の「四来発句」には、栗の本門人の句が多数入る。

⑤ 新菊や往来いききに障る井戸の端  
播州 青蘿

【訳】 普段、井戸端会議が行われ、また人の往来もある井戸端。そこに今年初めて咲いた菊を持ってきて置いてある。邪魔になるのだが、邪険にする人はいない。

【注】 菊は、井戸端に植えているのではなく、鉢植えの菊を持ってきて置いてるのである。せっかく咲いたのだから、大勢の人に見てもらいたい、しかし往来の邪魔になる。『むかしきく』は去来八十回忌集。重厚が跋を書いている。

⑥ たましみをまねかん月や萩のうへ  
青蘿

【訳】 蘿来の十三回忌、蘿来を慕って墓の周りには萩の花が咲く。その上の満月から蘿来の魂を招こうか。

【注】 『萩の輪』は青蘿門人の蘿来十三回忌集。青蘿の序文に「居士：萩の花のこほれやすきを愛せば、萩また居士の無為なるをしたふにぞ。をのづから其墳のほとりをめぐりて春秋の誠をあらはせり」とある。書名は墓の周りの萩による。端書は「天明四甲辰秋七月」。

⑦ うとければうとし、とはるれば亦なつかし

花菖蒲津田の細江のたよりかな  
青蘿

夏（花菖蒲） 出典『萩の輪』（天明四年、李雨・臥菊編）

【訳】 便りがなければ疎遠になるが、音信があるとやはりうれしそうだろ。今日、播州の津田の細江に、花菖蒲が咲いたとの便りがあった。

【注】蘭外、鰈交との三吟歌仙の発句。「那波の浦より竹裏舎へ師のをくらる、俳諧爰に加ふ」とある。蘭外は嵐外のもととの号であろう。鰈交とともに那波の栗の本門人である。三人で巻いた歌仙を、林田の雨人のもとに送った。津田の細江は播州の歌枕。

⑧ 春花のはなよりおこる嵐かな  
青蘿

【訳】落花さかな桜、一陣の風が吹くと花吹雪になる。まるで花の木の中から嵐が起こったようだ。

【注】「四季発句」春の部の発句。青蘿の代表句となり、没後、門人により句碑が建てられた。『松のそなた』（天明八年、紫暁編）にも入る。

⑨ 白芥子や美人かくる、草のいは  
青蘿

【訳】草庵のそばに白芥子が咲いている。その花のような、清楚な美人が隠れ住んでいるにちがいない。

【注】「四季発句」夏の部の句。白芥子は、佳人を連想させる。

⑩ 行としやかしらをあぐる田の雲雀  
青蘿

【訳】今年も終わろうとしている。冬の田で雲雀が餌をあさっているが、春を予感して頭をあげることだ。

【注】雲雀は春の季語だが、ここは越冬する田の雲雀。これは「四季発句」冬の部の句で、巻末句。

⑪ 朝貌のはやおもひ有更衣  
青蘿

【訳】更衣の今日、朝起きてすぐに夏衣に替えた。朝顔の模様の着物をみると、はや秋が思い出されることだ。

【注】朝顔は秋の季語。「朝の顔」と掛ける。

⑫ 中十日梅にわかれて初ざくら

加古川 青蘿

春(梅・桜) 出典『四山集』(天明五年、巴水編)

【訳】梅が散り終わり、十日をおいて今度は桜が咲き始める。まことに華やかな季節であることよ。

【注】『四山集』は、伊勢の巴水の別業新築の賀集。關更が跋を書く。各地の人の発句が出る中に、「播磨」として青蘿の句が出ている。

⑬ 白魚は梅につれだつ盛哉

姫路 青蘿

春(白魚・梅) 出典『夕暮塚』(天明五年、麥鴉編)

【訳】梅が咲くとそれに連れ立つように、白魚も春の到来を告げる。両者は、二月には盛りになる。

【注】「白魚」も「梅」も「毛吹草」(正保二年)では二月のもの。『夕暮塚』は蝶夢系俳書で、蝶夢が序文を書いている。栗の本門人布舟らも入集する。

⑭ ほと、ぎす啼やうごける像の中

播州カコ川 青蘿

夏(時鳥) 出典『奉扇会』(天明五年、沂風編)

【訳】奉扇会で祀られた扇の風に、芭蕉像はすこし動いたようだ。そこへ時鳥の一声がきこえた。

【注】この年の奉扇会は蝶夢が欠座している。青蘿は、門人の脱負、風虎、布舟らとともに投句している。

⑮ 待人は来ぬに定て時雨さく

青蘿

冬(時雨) 『しぐれ会』(天明五年、沂風編)

【訳】ずいぶん待ったのだが、待ち人は来なかった。もう来ないものとあきらめて、なすこともなく静かに時雨の音を聴くことだ。

【注】この年の時雨会は、沂風主催、蝶夢も同座している。青蘿門人の布舟出座、青蘿は投句のみで「四来奉納」の部に入る。

夏 ⑱ あつき日や撫子摘む山のかげ 青蘿  
 (あつき日・撫子) 出典『露の月』(天明五年、桃如・至峰編)

【訳】今日も暑い。どこもかんかん照りだが、山の陰になる所は涼しく、撫子が咲いている。ちよつと休んで、摘んでいこうか。

【注】『露の月』は、但馬の栗の本門人、重羽追善集。これは、重羽生前に巻いた青蘿・至峰・重羽の三吟歌仙で、青蘿が発句を詠む。青蘿は、重羽追善七吟歌仙にも一座して発句を詠む。また「四季之発句」の巻頭に青蘿の句が出る。「撫子」は、万葉集では秋草だが、古今集以後、和歌連歌俳諧では夏。

秋 ⑲ 花と咲もなき佛かわれもかう 青蘿  
 (吾亦紅) 出典『露の月』(天明五年、桃如・至峰編)

【訳】吾亦紅が咲いた。何やら人に似たその姿は、七月四日に逝つた亡き重羽の佛だろうか。

【注】重羽追善七吟歌仙の発句。脇は桃如、第三は至峰。詞書は「但馬の国大やぶなる重羽のぬし、文月四日と聞ゆるあしたの身まかりけると、風の音の生死無常の驚かしけるより、旅の杖笠とりあへず一簣斎に來りて、ともに香華をとり侍る」。吾亦紅は団子状の花を付け、人の形に似る。

春 ⑳ 水の気のとり付そむる柳かな 青蘿  
 (柳) 出典『露の月』(天明五年、桃如・至峰編)

【訳】春はまず水がぬるむ。また雪がとけて春の水となる。春雨が降る。そんな水の気は、まず川辺の柳にとりつくことだ。

【注】『露の月』の「四季之発句」の部の巻頭句。

①9 行先のはなを斗るや海の上 青蘿  
春(花) 出典『讃州金毘羅山芸州厳島詣之記』(天明五年、青蘿著)

【訳】さあ、船出だ、目指すは金毘羅と厳島。目的地の桜はきれいに咲いているかと、船の上で想像してみることだ。

【注】天明五年三月七日、青蘿は讃岐の金毘羅宮と安芸の厳島神社に詣るために備前の那波の浦を船出した。連れは、門人の鰐交、嵐外、旭松、梅山、芦径ら。『讃州金毘羅山芸州厳島詣之記』は、その時、青蘿が著した旅行記である。自筆稿本が残る(天理図書館)。この発句は、出発に際して皆で一句ずつ詠んだもの。見送りには、門人の松山と寒龍が来て、やはり発句を詠んでいる。

②0 春の夜やうしをうしとも夢心 青蘿  
春 出典『讃州金毘羅山芸州厳島詣之記』

【訳】牛窓の湊に船を泊め、一夜を過ごす。牛窓の「牛」ではないが、旅を「憂し」と思うと、すべてが春の夜の夢のようだ。

【注】第一夜は船中泊、牛窓の湊に船をつないだ。発句は、牛窓の地名を詠みこみ、春の夜の物憂さや、十年前の思い出がよみがえることなどを「夢心」として詠んだ。

②1 花にまれ旅する目には飯の山 青蘿  
春(花) 出典『讃州金毘羅山芸州厳島詣之記』

【訳】「花より団子」。花が咲いていようと、旅をしている自分にとっては、まず飯が大切。目の前にある飯野山がうれしい。

【注】「〜にまれ」は「〜であろうと」の意。眼前の讃岐富士、飯野山の地名を詠み込んだ。

春 ②② 春深く真昼も杉の嵐かな 青蘿  
出典『讃州金毘羅山芸州厳島詣之記』

【訳】金毘羅宮参詣。境内は杉の木立が生い茂り、真昼もあたりは暗い。春たけなわの頃だが杉に吹く風は、冬の嵐のようだ。心頭滅却する思いである。

【注】前書「奉納之吟」として風外、鰈交の句と共に出る。金毘羅宮奉納。前の文章は「たゞ閑情心頭を滅却する而已」。「心頭を滅却す」は、無念無想の境地。

春 ②③ 落馬して腰うつ蔭も桜かな 青蘿  
出典『讃州金毘羅山芸州厳島詣之記』

【訳】あたりは春爛漫で、桜桜。そんな中を、馬を借りて行く。うっかり落馬して、腰をしたたか打ったが、それも桜の木の蔭であった。

【注】金毘羅から丸亀へ戻る途中の吟。芭蕉の「歩行ならば杖突坂を落馬哉」（『笈の小文』）を思わせる。

春 ②④ こゝろ問へいづく泊りの春の海 青蘿  
出典『讃州金毘羅山芸州厳島詣之記』

【訳】また船出した。春の海は霞がかかり茫漠として、次の湊はどちらの方向かわからない。心の中で問うてみる。  
【注】三月十日、丸亀を船出し、安芸の宮島をめざす。句の前の文章は「呉楚東南に分れたるもかくや侍る。乾坤青眼に究めがたし」

しら石

夏 ②⑤ 白石の影くだけ行海月哉 青蘿  
（海月） 出典『讃州金毘羅山芸州厳島詣之記』

【訳】白石は島の名。その名にあるような白い石が砕けて泳いでいるのがこの海月たちであろうか。

【注】丸亀を出て厳島へ向かう途中、白石島がある。付近は大小の岩が多く、これも白石が砕けたようだ。海月は夏の季語（『滑稽雑談』）。

②6 嶋守りに逢ふて酒くめ桃の花 青蘿  
（桃の花） 出典『讃州金毘羅山芸州厳島詣之記』

【訳】小島に船をつける。しかし、人は見えない。桃源郷のようなこの地で、嶋守に逢ったら、桃の酒を酌み交わそう。

【注】小島に船をつけて、茶の水などを求めようとしたが、人の住んでいそうな所はなく、雉が鳴き菜の花が咲いているのであった。

②7 かまかりや夕日をかけて岩つゝ、じ 青蘿  
（躑躅） 出典『讃州金毘羅山芸州厳島詣之記』

【訳】海上に蒲刈島が見える。船からみると、夕日に届きそうなほど岩躑躅が咲き誇って美しい。

【注】「かまかり」は蒲刈で、島の名、現在の呉市にある。前の文章「人家薨を重ね、白壁霞を引て長し」とある。

②8 身ひとつは波も寝よげに春の月 青蘿  
（春の月） 出典『讃州金毘羅山芸州厳島詣之記』

【訳】旅寝の波枕、船の上で月を見ながら身を横たえるのも、寝よいものだ。

【注】船中泊。「月のいつかうしみつを過るもしらざりける」とある。

②9 さむけ立瀬戸の春風汐けぶり 青蘿  
（春風） 出典『讃州金毘羅山芸州厳島詣之記』

【訳】音戸の瀬戸は潮流が激しく、そこを船で過ぎるのは恐ろしい。瀬戸内の春風がしぶきを吹き上げるのを見な

がら、おそるおそる通ったことだ。春ながら寒気がたった。

【注】前書「隠戸の瀬戸」。音戸の瀬戸は、現在の呉市にある海峡、潮流が激しいので有名。「おむどのせ」といふは滝のごとくに潮はやく狭き処なり、舟どもおし落されじと手もたゆくごぐめり」（『鹿苑院殿巖嶋詣記』）

春 ③〇 廻廊や潮みち月にさくらあり 青蘿

【訳】巖島神社に参籠した。廻廊に潮が満ち、三月半ばの月と桜の美しい風景に、目はさえて眠るどころではない。

【注】本殿の廻廊を詠んだ。この句は、当地の瓜道の家に招かれて、瓜道・蝦交と連句を卷いたときの発句である。

千畳敷

春 ③① 霞ともに海をいれたる座敷哉 青蘿

【訳】巖島の千畳敷。すぐ下には、潮が満ちて海が入っており、あたりは霞み渡っている。

【注】「千畳敷」は巖島神社神前の大経堂。ここで酒肴を喫す。潮が満ちると下まで海水が来る。

社頭の鹿

春 ③② 枕にもなれよ旅寝のはるの鹿 青蘿

【訳】春の鹿が巖島神社の社頭にたくさん群れている。おとなしい春の鹿は、私の旅寝の枕にもなつてほしいもの

だ。  
【注】春の鹿は、牡鹿は角が落ち、牝鹿は孕む。どちらも動きがぶく気弱になっている。

連歌堂にて

③③ ちるはなを墨にすりこめ旅硯 青蘿

春(花) 出典『讃州金毘羅山芸州厳島詣之記』

【訳】 厳島神社の連歌堂、ここで一句を詠もうと出した旅硯に、花が散りかかる。墨とともにすり込んでしまおう。

【注】 厳島神社の摂社、天神社を連歌堂と称し、そこで連歌が行われていた。連歌に硯はつきもの。

③④ うごきなき不動の顔や花の中 青蘿

春(花) 出典『讃州金毘羅山芸州厳島詣之記』

【訳】 微動だにしないお不動様の顔が、満開の桜に囲まれて見える。心なしか、恐ろしい顔も微笑んでいるようだ。

【注】 弥山に登り、奥の院へ行った。白糸の滝、滝不動がある。「不動」を「うごきなき」と詠んだ。

おわりに

天明朝、この頃は青蘿の俳諧がもつとも充実していたかもしれない。⑧「散花のはなよりおこる嵐かな」は青蘿の代表句とされ、句碑になっている。たしかに、花吹雪の激しさと美しさを余すことなく詠んでいる。他の句も、一ひねり趣向があるものが多い。

今回注解した発句の半数近くは、『讃州金毘羅山芸州厳島詣之記』中のものである。同書の文章には、芭蕉の『奥の細道』を引いた箇所がすくなくならずあり、青蘿が『奥の細道』を机右の書としていたことが知られる。しかし、『奥の細道』中の句のような奥深さは、青蘿の句には感じられない。

# The Notes of Seira's Haikus IV

Shizuko TOMITA

This is the fourth study of "The Notes of Seira's Haikus" series.

It writes the notes on the works composed by Seira Kurinomoto between Tenmei 2nd (1782) and 5th (1785). At that time, he was from the age of 43 to 46. In those days, the number of his pupils were increasing. He became an influencer as a haikai master. Many of his pupils were affluent people and authorities in Harima. Syouyas, ojouyas, brewers, and shipping agents accounted for a large part of his pupils. A memorial book and a New year's book were published by them as the books of the school.

In Tenmei 5th, he visited Kotohira-gu Shrine in Sanuki and Itsukushima Shrine in Aki with his pupils. The cruise was lively. "Sansyu Kompirasann Geisyu Itukusima moudenoki" is the travelogue which depicted the trip. It includes 16 haikus by Seira. I wrote the notes on them in this paper.